

# 教育

## きらめく成長物語 一緒に楽しむ

### 学びの交差点



武蔵野東第一・第二幼稚園園長

加藤 篤彦さん(63)

7月初旬、東京都武蔵野市の幼稚園。10人ほどの年長の子もたちが机に向かい、傘の絵にカラフルな色を塗っていた。少人数クラスで過ごす自閉スペクトラム症の子もたち。中でも特に熱心に色を塗っている女の子がいた。「この子にもいろんなドラマがあったんですよ」。加藤篤彦さん(63)はそう話し、昔の動画や写真を見せてくれた。

加藤さんが園長を務める武蔵野東第一・第二幼稚園は、自閉症の子もそうでない子もともに学ぶ「混合教育」を掲げている。今年4月時点で、2園の園児計488人のうち、自閉症の子は66人へのぼる。

も関わろうとしない。そんな女の子に教職員は根気強く声をかけ続け、周りの子どもたちも遊びに誘った。すると女の子は徐々にクラスでの活動に参加するようになり、笑顔を見せるようになった……。

武蔵野東幼稚園では、自閉症の子は、それ以外の子とは別の少人数クラスに入る。両者を分け隔てているのではないかと指摘されることもあったが、加藤さんは「しっかりとした目的がある」と話す。

「子どもの心には安心できる『快適空間』があり、その外側にチャレンジする『背伸び空間』、さらにその外側にパニックになる『混乱空間』がある。自閉症の子をいきなり通常クラスに入れると、チャレンジ



いずれも東京都武蔵野市、伊ヶ崎忍撮影

自閉症の子のための少人数クラスでは、写真やイラストをふんだんに使い、「あさのあつまり」や「おんがく」などの活動に参加するよう促していく。

## 自閉症の子も そうでない子も ともに学ぶ多様性

どころかパニックになる恐れがある。まずは安心できる環境を整え、少しずつできることを増やしてもらおうとしています。武蔵野東幼稚園では、自閉症の子は状況に応じ、通常クラスへ通級する。朝の集まりや昼食などに参加する機会を徐々に増やし、中には週数日と限定的ながら、一日すべてを通常クラスで過ごす子もいる。

加藤さんはもともと系列の小学校の教員だった。87年に幼稚園に異動になり、幼児教育にのめり込んだ。昔は小学校の内容を先取りする幼稚園が良いとされてきた。混合教育の話をすると、「レベルの低い教育をしているんですね」と言われたほど。カチンときた。もっと理解してもらいたいと思いましたが、2003年に園長に就任。本業の傍ら、幼児教育の研究會などで混合教育の重要性を訴えてきた。この20年で自閉症に対する社会の理解も進み、教育業界ではインクルーシブ教育とい

う言葉が当たり前に使われるようになった。加藤さんは専門家として、4月に発足したことも家庭庁の有識者委員会にも参加している。家庭の変化も感じる。昔は父親は仕事に専念し、母親は自閉症の子のために身を捧げるという家庭が多かった。今は共働きが増え、保護者と子どもがともに過ごす時間が減った。働く親のための福祉制度も充実し、海外では自閉症の子をほぼ一年中預かるサービスもあるという。加藤さんは、「社会が洗練化する一方、汗臭く泥臭い幼児期の子育てはまさにカオス」。しかし大変さはかりでなく、魅力も目を向けてほしいという。「泥の中から咲くハスの花のように、子どもたちにはきらめく成長の物語がある。そんな物語を共有し、保護者と一緒に子育てを楽しみたい。そんな幼稚園でありたい」(狩野浩平)

**しごとの相棒** スマホで撮影 保護者と共有

自閉症の子の成長には、幼稚園と保護者の情報共有が欠かせない。子どもたちを撮影し、アプリで成長の様子を伝えられるスマートフォンは、加藤さんにとって欠かせない相棒だ。

**取材後記** ともに生きる社会 伝えたい

子どもの声に耳を澄まし、様子を見ながら少しの背伸びを促す。武蔵野東幼稚園が自閉症の子の教育で大切にしていることは、一般的な子育てにも示唆に富む。同園によると、通常クラスの子も自閉症の子との交流を通じて成長しているという。学び合い、高め合う関係づくりを、未就学児が実践している。

9年前の入社して間もない頃、知的・発達障害の子のインクルーシブ教育を進める団体の記事を書いた。団体の人はこう話していた。「障害のある子どもも、社会に出て働き始めたらともに生きていかなければならない」。これからも、ともに生きられる社会の実現のための取り組みを伝えていきたい。